

## 司会

東京大学大学院医学系研究科  
消化器内科学教授

小池 和彦 先生

## 出席者

(発言順)

久留米大学医学部内科学講座  
消化器内科部門講師

川口 巧 先生

東京大学大学院医学系研究科  
特任講師

建石 良介 先生

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科  
分子腫瘍医学分野教授

田中 真二 先生



# 代謝関連肝癌の実態と病態

【2018年3月6日 帝国ホテルにて開催】

**従**来、肝癌の主因はB型あるいはC型肝炎ウイルスの持続的な感染であったが、予防や治療の進展によりウイルスは制御され、近年はウイルス感染を伴わないnonBnonC型肝炎の割合が増加している。

nonBnonC型肝炎の背景はさまざまであるが、飲酒や肥満に関連する代謝関連肝癌が主体であり、糖尿病との関連性も示唆されている。またNAFLD(非アルコール性脂肪肝疾患)やNASH(非アルコール性脂肪肝炎)からnonBnonC型肝炎に至るケースも少なくない。

本座談会では、代謝関連肝癌であるnonBnonC型肝炎について、その病態と発癌機序、さらに今後の対策として代謝関連肝癌患者をいかに拾い上げるかを、最近の研究をもとに3人の先生方にご討議いただいた。

## はじめに

**小池** 20年ほど前の日本では肝癌の95%はC型あるいはB型肝炎ウイルスの患者でしたが、近頃は様相が変わり、30%以上がnonBnonC型肝炎になっています。実は2000年頃のアメリカがまさにそういった状態でしたので、日本もアメリカ型の肝癌パターンになってきたともいえます。

一方で、C型肝炎関連肝癌の研究からC型肝炎は代謝性疾患であることがわかり、代謝と肝癌が注目されてきました。その後、nonBnonC型肝炎も代謝関連肝癌が主体であることがわかってきたわけです。

そこで本日は、これまでの研究をもとに、C型肝炎か

らnonBnonC型肝炎、さらに代謝関連肝癌の発癌機序について、お話をいただきたいと思います。

## C型肝炎からNAFLDへ： 肝疾患と糖・脂質代謝

**小池** まずC型肝炎の研究、肝疾患と糖・脂質代謝、そして肝癌との関連性について、川口先生からお話しいただけますか。

**川口** 2004年に小池先生のグループが、C型肝炎ウイルス(HCV)のコア蛋白を発現するトランスジェニックマウスがインスリン抵抗性の状態にあることを証明されました<sup>1)</sup>。その一機序としてHCVコア蛋白により、細胞内インスリンシグナルのkey moleculeであるインスリン